

使者の往来と唐代東アジアの文化交流

—新発見の唐代墓誌碑刻資料を中心に

拝 根興
(王博 訳)

はじめに

漢及び唐代の中国では長期にわたって、その都の長安は関中という内陸部に位置しており、西北少数民族政権からの脅威が絶えなかったため、遙かにある海洋に対して人為的且つ計画的な意向を持っていなかったようだ。そのため、中国の学者である胡戟は「漢唐時代は長期的に海洋意識が欠いていることは中国の一大問題」だとの認識を示した⁽¹⁾。ただし、はっきりと言えば、東アジアに位置する朝鮮半島と日本列島から頻繁に遣わされた多くの善意、あるいはやや客観的な悪意を抱える使者に面して、唐王朝はかつて良好な交流を行った。すなわち、使者を派遣して海をわたって夢を実現し、多くの思い出や歴史的痕跡を残した。このようにして、唐王朝、新羅、日本という東アジア三国間における文化交流が相対的に栄える局面を迎えた⁽²⁾。中、日、韓に現存する文献史料が多く研究者に共有されている現状にかんがみて、本稿は現存する唐代碑刻墓誌、特に新発見の墓誌を媒介とし、各方面の使者及び僧侶、道士の往来に基づき、「海」という要素の下に行われた唐代東アジア三国における文化交流の意義を探ってみたい。

一、 天寶・大暦年間に唐羅間に往来する人物たち

この時期に唐、新羅間に往来する政府派遣の使者、宗教者に関しては、現存する文献史料と現在の論著で多く言及されている。しかし、これまであまり注目されなかった石刻墓誌史料及び近年に公開された墓誌の中に、一般史料に見えない入唐新羅人や新羅に行き来した唐人の行跡が見られ、この時期の唐朝と新羅との交流に多くの特別な事例を提供している。

1、 岐州大雲寺に駐留した新羅和上

2000年に出土した『唐故鴻臚寺丞李府君夫人琅琊王氏墓誌銘並序』に見える「新羅和上」はその一例である⁽³⁾。墓誌に墓主の王氏をこう記している。

天寶初、有大雲寺新羅和上者、崇啓道門。夫人禮謁至誠、廻向便為上足、一心齋戒、十載

住持。契不二之門、以寂滅為樂。窮歸一之義、明色即是空。体性如如、喜怒不干於顔色。心
神杳杳、憎愛無雜於言懷。豈可不以為如蓮花不著水、居然有道者也。

天宝初年、大雲寺に新羅人和上がおり、(彼が) さかんに道門を開いた。夫人は真心を込
めて(新羅人和上を) 礼拝し、功德を施してその弟子になり、一心に齋戒を行い、十年にわ
たって仏法を信仰した。(夫人は) 最上の法を悟り、「寂滅」を楽しみとした。(夫人は) 帰
一の義を極め、「色即是空」の意味をよく理解した。(夫人は) 天性が恭順で、喜怒を顔に表
さない。心神が奥深くて、憎愛を言辞に交らせない。蓮の花が(池から取り出してもその上
に) 一滴の水もつかないように、そのままで道を備えている、というべきである。

この史料には以下の情報が含まれている。

一、新羅和上が大雲寺に来たのが天宝初年ということは、その時間はおよそ天宝五年前後にな
る。さらに、王氏は天宝九年に亡くなり、墓誌に「十載住持」とあり、ここの「十載」は大雑把
な言い方である可能性が高く、これによって新羅和上が寺に来たのは天宝元年か二年と推定でき
よう。

二、新羅和上が大雲寺に停留する間に、王氏は彼を十年間にわたって尊敬しつつ、心が動揺し
たことがなかった。これもまた側面から新羅和上が大雲寺に長く駐留したことを裏付けている。

三、新羅和上のその後の行跡について、墓誌文に触れておらず、現存史料にも見えない。

四、新羅和上は信徒と上手く交流でき、相当な礼遇を受けているから、上手に唐朝の言語が話
せ、また仏教經典にも精通する能力を備えていたことがうかがえ、入唐してから長く唐に滞在し、
深い仏教の素養を持ち、当時では一定の声望を持つ新羅僧侶のはずである。新羅和上に関する詳
細の事績及び大雲寺が所在する岐州における仏教の伝播状況、当時に求法で入唐した新羅僧侶の
規模、僧侶たちが入唐してからの行跡、彼らが唐の仏教に与えた影響などは本文の中心内容では
ない故に、ここでは省略するが、これらの新羅僧侶が一心にして仏法に身をかたむけ、険しい海
を渡り、唐で信徒に尊敬される大師になれたことには、深く感服させられる。

2、光祿卿に拝された新羅王子の金日晟

新羅王族の『金日晟墓誌』の公開は⁽⁴⁾、中唐時期における唐、新羅両国関係に重要な資料を提
供した。本墓誌は、中唐時期における唐と新羅の関係に重要な史料である。金日晟は、唐・代宗
朝大暦九年(774)に亡くなり、享年六十二歳であるから、その生誕は唐・玄宗朝開元元年(713)
である。墓誌文の冒頭で金日晟のことを次のように説明している。

諱日晟、字日用、新羅王之從兄也。壯烈内蘊、丹誠天縱。歸奉中朝、率先萬國。上嘉之、
累授銀青光祿大夫、光祿卿。位列天階、名登國史。紹開遺緒、不忝前人。

諱は日晟、字は日用、新羅王の從兄である。豪胆さは内につつまかくし、忠実さは大いに
あらわれた。万国に率先して唐政府に仕えた。皇帝は金日晟を表彰し、銀青光祿大夫、光祿
卿の官職を引き続いて授けられた。唐政府の一員として朝廷に並ばれ、その名も国の実録に
載せられる。先人の功業を継ぎつつ、先人以上にそれを発揚した。

まず、筆者は韓国側の史料、『三国史記』『三国遺事』などに依拠し、金日晟は新羅の孝成王、景德王の従兄だと考証し、墓誌文に最も問題となった身分問題を解決した。次に、金日晟はいつ入唐したか、彼が入唐した当初の身分、目的及び唐の中央政府で官職を担った原因などをめぐって、筆者は合理的な解答を提示した。第三に、金日晟の婚姻及び亡くなった後に唐側が取った措置について、『大唐六典』『唐会要』などの記載に依拠して有効な考えを示した。要するに、金日晟の故夫人張氏は唐人であり、安史の乱の時期に亡くなった可能性が高い。金日晟が唐で官職を務め、長いあいだ唐に滞在したのは、彼が唐人と結婚し、戦乱時期にあったこと、唐文化を慕う気持ちが強かったことと関係すると考えられる。新羅聖徳王が即位して以来、孝成王、景德王、恵恭王を経て、唐との交流が非常に盛んに行われた時期であった。その時期における両国の使節の往来がよく史料に見え、新羅側は定期的に宿衛を担う質子を唐まで送り、彼らは文化使者の役割を果たした。また唐側では、道教の布教者が新羅へ渡ったり、入唐して仏法を求める新羅僧侶が絶えなかったりしたことは、その繁栄さを示している。金日晟はまさにその風潮に乗って、怯えながらも憧れを持って海をわたって唐土に来たのであろう。

3、求法で入唐した新羅真子（質子）談蔵

王室出身の新羅僧の談蔵が大暦十三年（778）に入唐した。これについて、史書に次のように記している。

有若新羅真（質）子曰談蔵、浮海而至、止於山間、迴向懇到、發其誕願、乃於寺内建文殊師利菩薩堂焉。又於堂内立我隴西王洎夫人邠国夫人谷氏真形於其次、所以存相展敬、荷恩昭報也。規心匠智、庀徒葺事、徵工攻木陶甌、窮妙凝鑠、人隨悅來、事與念就、乃畢土木、乃備丹素。綵錯翬飛、霞張電燄、儼八部以營衛、列四天以護持。如登化城、窈入空境。作禮端肅、則文殊垂教之迹可歸也。潔誠趨奉、則隴西護法之恩可報也。

ある新羅の（真）質子は談蔵といい、海に浮かんで（ここまで）至り、山の奥に止まった。（談蔵）は真摯に仏教に帰依し、大きな祈願を発し、寺の中に文殊師利菩薩堂を建てた。また、隴西王および邠国夫人の谷氏の像を文殊師利菩薩の次に立てた。これは、受けた恩恵を返すために隴西王らを祭ったのである。心から企画し知恵で準備を始めれば、あとは匠人を集めることで完成できる。匠人を雇って木を伐り陶器を焼き、「凝」と「鑠」の技を極めた。遠近の人々が喜び勇んで工事に来たおかげで、事業は思った通りに遂げ、工事を終了し、顔料を用いて色を施した。色は雉が飛ぶように交錯し、光は稲光のようにとりどりに輝く。八部衆を立てて護衛させ、四天王を並べて護持させる。ここに来ると化城に登ったようで、奥深い気持ちで空の境地に入る。厳粛に敬礼すれば、文殊菩薩の教えの跡に心を寄せることができる。真心を込めて仕えれば、隴西王の護法の恩に報いることができる⁽⁵⁾。

これまで中国と韓国の学者は、上述の史料に出る談蔵を普通の新羅求法僧だと見なしてきたので、あまり注目されなかった。しかし、この「海に浮かんできた」不思議な僧侶について、筆者は以下の諸点に注意すべきだと考える。

一、恐らく転写過程のミスか、「真子」は「質子」の書き間違いのようである。談蔵という名前と「文殊師利菩薩堂」の建造から、談蔵の身分は僧侶だと察知できる。仏教を好む唐の代宗に合わせ、新羅は王室から仏教徒を選んで質子を担わせた可能性が十分考えられる。

二、史料によれば、成徳節度使の李宝臣は「光膺朝寄、主東之諸侯、保和師旅、康靖方夏（光栄にも朝廷から依頼され、東方の諸侯らを管理し、諸軍を控え、方華の平和を守護した）」、つまり、この時期、李宝臣は唐と新羅を含める諸国の往来を管理する事務を担当していた。新羅使節、留学生らが長安、洛陽などを行き来するには、成徳鎮は避けて通ることの出来ない道である。そこで、新羅質子が「文殊師利菩薩堂」を建造するのは容易に理解できる。これと関係して、成徳節度使の李宝臣と押新羅渤海両蕃使淄青節度使の李正己は、新羅、渤海使節の往来にあたって、分担して管理したのか、あるいはそれぞれに重点を置いて管理したのか、さらに割拠してそれぞれ勝手に管理したのか、考えるべきであろう。これまで、黎虎、姜清波両氏の押新羅渤海使に関する論文では⁽⁶⁾、成徳節度使の李宝臣が蕃属国の朝貢ルートに関わっていたことに言及してこなかったもので、談蔵の入唐は、当研究を補充することになる。

もちろん上記の文を書いた邵真が事実を誇張したかもしれないが、新羅質子の談蔵が定恵寺で文殊師利菩薩堂を修造し、李宝臣夫婦像を作ったことに疑問はないはずである。

三、談蔵が定恵寺で文殊師利菩薩堂を修造し、また堂内に李宝臣夫婦像を作ったことは、彼に相当の経済的実力が備わっていることを示している。通常、初めて求法で入唐した僧侶に、このような実力を持っている者は非常に稀である。その原因を問えば、談蔵には政府の後ろ盾がある程度あり、また新羅王廷から同意や首肯を得ていたことがうかがえる。なぜなら、政府との関係と経済力が相当にないと、このような工事はできないからである。当時の藩鎮割拠及び唐王朝とその周辺民族との交流状況から見ても、このようなことは域外の人の中で多く存在しない。

四、談蔵が文殊師利菩薩堂を修造すると同時に、李宝臣とその夫人の像を立てたことから、談蔵は成徳管轄内及び唐王朝では藩鎮が割拠している情勢を洞察しており、権力者の好みに合わせる意識があったことがわかる。彼は仏教の素養を持つほか、唐人の好き嫌いもわきまえており、「唐朝通」のような人物だと言える。

五、談蔵が定恵寺で文殊師利菩薩堂を修造したことから、唐・代宗朝に新羅との間で仏教関係者の交流が盛んに行われ、そこに新羅王室の人物までも加えられていたことがわかる。これは唐と新羅双方の友好関係が確保されていただけでなく、新羅が質子を遣わして入唐するやり方は安史の乱でも混乱しなかったことを示している。

4、新羅へ道教靈符・経典を宣揚する道士皇甫奉諤

皇甫奉諤墓は西安市長安区引鎮の北部に位置している。墓誌はいつ、どのような経緯で出土したかは不明である。この墓誌は2009年に西安大唐西市博物館に入蔵された。『大唐故道門大徳玄真観主皇甫尊師墓誌銘並序』によれば、墓主の皇甫奉諤は天宝初年に次のような功業があった。

祥符發於尹真人故宅、聲教遐布、有詔以童誦隨三洞法主秘希一傳經新羅。復於王庭、光錫羽珮、甫廿五歲矣。

めでたい符が尹真人の故居から発見され、尊い教えは遠くまで伝えようと、皇帝が詔を下し、皇甫奉諲に童誦の身分で三洞法主の秘希一に随行して新羅へお経を宣揚しに赴かせた。皇甫奉諲は王庭に戻り、羽珮を賜われた。時に二十五歳であった⁽⁷⁾。

このことから、皇甫奉諲はかつて三洞法主の秘希一に従って新羅へ赴いたことがわかる。これについて、『資治通鑑』巻二一五、天宝元年正月条にこうある。

甲寅、陳王府參軍田同秀上言、「見玄元皇帝於丹鳳門之空中、告以我藏靈符、在尹喜故宅。」上遣使於函谷關尹喜臺旁求得之。……壬辰、群臣上表、以「函谷寶符、潛應年號。先天不違、請上遵號天寶字。」從之。二月、辛卯、上享玄元皇帝於新廟。甲午、享太廟。丙申、合祀天地於南郊、赦天下。

甲寅、陳王府參軍の田同秀が「玄元皇帝を丹鳳門の空中に見た。(玄元皇帝から)尹喜の故居に靈符を隠してあると告げられた」と上言した。皇帝は使いをもとの函谷関の尹喜台に遣ってその傍らでこれを得た……壬辰、群臣が上表した、「函谷の宝符はひそかに年号に呼応している。先天の意志に背かないように、天宝という字に号を従えてください」と。二月、辛卯、帝は玄元皇帝を新廟に祭った。甲午、太廟を祭った。丙申、天地を南郊に祀り、天下に恩赦した⁽⁸⁾。

当年六月、唐王朝は詔を「中外に宣布した」⁽⁹⁾。誌文及び史料を合わせれば、皇甫奉諲が新羅へ赴いたのには以下の二重の使命を担っていたことがうかがえる。

一、彼が新羅に赴いた具体的な時間を示す史料はないが、時に唐は改元したばかりで、唐と周辺民族、国家が長年つき合って形成してきた慣例によって、唐は使者を周辺諸国へ遣わし、改元の詔を伝達すべきである。秘希一の一行が新羅へ赴いたことにもこのような使命があったかもしれない。魏曜の一行が新羅へ赴いた時期との前後関係は不明であるので、ここでは判断を保留とする。

二、新たに発見された道教の靈符と、それに関係する道教教義や經典を朝鮮半島へ伝えること。そもそも、唐は建国初期に、かつて道士を遣わして天尊像と道法を持参して高麗(高句麗)へ赴かせ、老子『道德經』を宣伝した。高麗の栄留王とその国民が積極的にそれを受けたことは当時の美談になった。また栄留王も使者を派遣して「仏教と老子の教えを求めに行った」⁽¹⁰⁾。筆者は、高麗の上層階級で道教勢力が強まった傾向が生じたことによって、その内部の仏教信徒が軽視され、ために高麗政權に内乱が起こって、これが滅亡に至った導火線になったのではないかと考える⁽¹¹⁾。韓国学者の車柱環、張寅成は朝鮮半島の道教と道教文化の発展の道筋を探求して同じような観点を得た⁽¹²⁾。ただ、道教がいつ新羅に伝来したかは、史料に明確な記載が見えず、現在の論著でもあまり論じられていない。新羅孝成王が王位を継ぎ、唐の玄宗皇帝が左贊善大夫の邢璣を遣わして册封を行なった。その際に、邢璣は老子『道德經』などの經典を王に献じた。前述したように、同年、玄宗はまた贊善大夫の魏曜を新羅へ派遣し、弔問と册封を行ない、自ら注釈を施した『孝經』を下賜した。

墓誌文では、秘希一の一行は新羅へ道教の靈符と經典の宣伝に赴いたが、随行した皇甫奉諫の身分は注意すべきである。彼は「童誦」という身分で新羅に行ったが、誌文によれば、この年、皇甫奉諫は二十一歳で、どうも「童」と関連することは難しい。彼は二十一歳でありながら、その肉声が子供に酷似し、新発見した靈符と經典を上手に朗誦できるのか。あるいは、彼は「童誦」の引率者として数名の童子を率い、新羅で道教靈符と經典を朗誦したのか。誌文から前者の可能性が高いと見られる。いずれにしても、秘希一の一行が新羅に到着し、「皇甫奉諫は王庭に戻り、羽珮を賜われ、時は二十五歳であった」、「童誦」を生かして、唐で至上と尊ばれた道教の靈符と經典を上手く宣伝することが出来、初期の目的を達成したのである。このように、皇甫奉諫に朝鮮半島へ赴く機会が与えられ、唐朝の道教崇拝の雰囲気の下で、宮廷に進出し、高い名声を挙げた。唐の代宗は仏教を尊敬していたにもかかわらず、皇甫奉諫はその在位期間を次のように記している。

其醮火壇金、飛章告籙、固以平成九氣、降格三清、有助神功、允敷聖澤。前後賜衣五副、綾絹一百疋、金錢卅千、旌有道也。

醮をおこなったり壇に上って祭祀したり、天に上章したり籙を受けたりし、かくて九気を落ち着かせ、三清も降りてきた。神靈の力に助けられ、皇帝の恩徳が広められる。その有道を褒めるものとして、皇帝より衣服五枚、綾絹百疋、金三千が下賜された。

玄真観は現在の西安市のどこに所在するか⁽¹³⁾、皇甫奉諫が道教靈符の教義を布教することは、新羅道教にどのように影響を与えたのか、その後、新羅道教の発展状況はどうだったか、といった問題については史料にあまり記載が見えないが、唐の賓貢進士の金可記は道教を信奉し、終南山の子午谷で修行し、座化したことが知られている⁽¹⁴⁾。新羅国内の道教の具体的な発展状況はこれからの研究に期待したい。

二、墓誌に見える唐中期に唐が新羅へ派遣した使者

周知のように、唐と朝鮮半島、日本のあいだで、使者を遣わして険しい海を行き来することは非常に困難なことであった。当時は航海技術に限界があり、国の使命を担い、国に命を捧げる使者たちの意志が試された。そんな中、多くの人が命を落としたが、それにもかかわらず、たくさんの使者が次々と敢行し、高い品格と強い国家意識を示している。史料では明確に初唐、盛唐時期に唐が新羅に遣わした使者を記しており、中国と外国の学者もこれについて論じている。例えば、韓国磐、楊昭全の研究が挙げられよう⁽¹⁵⁾。これに対して、中唐における両国間の交流を示す史料は少なく、当時の真相探求に影響を与えている。筆者は七件の唐人墓誌を調査したが、これらの墓誌史料は、中唐において唐と新羅が海を媒介にして密接な関係を結んでいたことを示している。また、使者が新羅へ赴いたのは、海に対する意識と関係することに注意すべきである。

学者官僚の馬盧符は使者として新羅へ赴き⁽¹⁶⁾、唐に戻ってから『新羅紀行』という本を著した。筆者の考証によれば、彼が新羅へ行ったのは中唐時期に当たる代宗、徳宗両朝のことであった。

また、史書では、唐側の使者あるいはその従者で、新羅から帰国して旅行記あるいは事実を記録する本を書いた人を伝えている。例えば、張楚金『翰苑』、顧愔『新羅国記』などが特に有名であった⁽¹⁷⁾。また、高麗に赴いた使者が書いたものもある。左賛善大夫、主客員外郎の馬盧符が書いた『新羅紀行』に大きな史料の価値があることは間違いない。しかし、これが顧愔『新羅国記』と同じように現存していないことは、非常に残念である。

宦官の武自和は三年間に二度、使者として新羅へ赴いた。その墓誌銘によれば、彼は元和年間に福建地方の監軍使を勤め、朝廷に戻ってから殿前内養になった。そのうち、穆宗の登極に何らかの貢献をしたことによって、「緑衣を賜われ、登仕郎、内侍省内府局丞の官職に授けられる」ことになったようである。誌文では彼が新羅へ赴いた時期に言及していないが、「宝暦三年になって、文宗は即位し、山陵修築判官に撰充される」とあり、また、その目的は、「詔を奉じて新羅宣慰告哀などの使命を担う」とある。では、これをどう理解すべきであろうか。私見によれば、第一に、武自和が新羅へ赴いたのは、宝暦三年（827）以前である。第二に、その使命は唐の皇帝が崩御したことにある。宝暦二年十二月に、唐の敬宗が崩御した。その時間から推定したならば、武自和がすぐに新羅を往復することはあり得ない。そのため、彼が新羅へ赴いたのは、穆宗あるいは憲宗が崩御したときに限られる。誌文から見れば、憲宗の死後に、武自和は新しい職位を授けられており、新羅へ赴く可能性は高くない。そうすると、彼が新羅へ赴いたのは、穆宗が崩御した後になる。すなわち長慶四年（824）である。『冊府元龜』卷六六九に、武自和がもう一人の宦官の吐突士昕とともに新羅へ鷹鷂を取りに行ったことを伝えており、時間は宝暦二年（826）であることが確かである。これは長慶四年に新羅へ赴いたことと同一なのであろうか。恐らく同一ではない可能性が高いと思われる。なぜならば、第一に、誌文では、長慶四年に新羅へ赴いた使命は「奉詔充新羅宣慰告哀等使」と明らかにしており、また、これまでの慣例に従い、唐の皇帝が崩御すれば、藩属国の新羅へその情報を伝達することが必要であるからである。第二に、もし本当にその使命が鷹鷂を取りにいくのだとしたら、誌文に「宣慰告哀等使」と書いたことは理解できない。誌文が書かれたのは武自和が新羅へ赴いて十年後のことであったが、彼が新羅へ赴き、帰ってから左遷となり、流されたことは多くの人に知られた。誌文を書いた「将仕郎試太子通事舍人の張模」も知っていたはずである。恐らく長慶四年に武自和が新羅へ赴いたのは好評を博しており、武自和は新羅での見聞をよく語り、それが遊びに夢中の敬宗の耳に入ったから、敬宗は彼と吐突士昕を新羅へ鷹鷂を取りに行かせたのであろう。つまり、武自和は824-826の三年間に二度も新羅を往復したことになる。彼が二回目に新羅から唐に帰国したとき、敬宗が殺され、宦官集団の内輪もめが始まり、政局に大きな変化が起こった。その結果、武自和と吐突士昕が所属する宦官集団が敗北し、武自和は左遷された、と考えられる。誌文では宝暦三年（二月に太和に改元）に、武自和は「山陵修築判官に撰充される」とあり、これは再び起用されたことであろう。吐突士昕は洛陽付近にある高宗の太子、李弘の恭陵に流され、武自和は長安に「南衛に配される」とあるから、二人に対する処分には相違があることがわかる。中唐の時期に、宦官の武自和は海を越えて三年に二回も新羅を往復し、使命を完遂したことで、唐、新羅両国の友好交流に貢献した。

宮闈局令充閣門使の朱朝政は新羅に三年間駐在した。朱朝政の名は正史及びほかの史料に見え

ないが、その母の趙氏の墓誌文からその事跡が確認できる。誌文によれば、趙氏は太和八年（834）十一月中旬に亡くなり、その生前に朱朝政は既に新羅より帰国していた。つまり、朱朝政が使者として新羅へ赴いたのは文宗朝の太和八年以前であった。また、墓誌の行文から見れば、朱朝政が帰国してから間もなくして趙氏は過度に喜び、世を去ったようである⁽¹⁸⁾。また、朱朝政が命令を受けて新羅へ赴いたのは、史料によく見える冊封、哀事の知らせ、弔問などの使命ではなかった。彼がどんな公務で新羅に三年間も滞在したかは不明である。前文に挙げたように、宦官の吐突士昕と武自和は、敬宗のために鷹鷓を取りに行くことで新羅へ赴いた。朱朝政が新羅へ赴いたのも皇帝本人の要求と関わっていたのかもしれない。したがって、今回は何らかのしっかりした使命で新羅へ行った可能性がある。この時点では、新羅の興徳王（826-836）が在位し、唐と新羅双方が緊密な友好関係を抱え、新羅側は七回の使者を唐に遣わし、朝貢を行っていた。唐からも使者を新羅へ派遣し、冊封、弔問などを行なった。注意すべきことは、828年に入唐した新羅使者の金大廉は、お茶の種を新羅へ持ち帰り、新羅の茶木栽培史を開いた。朱朝政がこの時に新羅へ赴き長期に駐留したことは⁽¹⁹⁾、双方の関係を強化する役割を果たしたと思われる。

太子賛善大夫、充册立副使の苗弘本は、危急存亡の際に使命を受けた。苗弘本が新羅で際立っていたことは、新発見の墓誌から明らかになった。苗弘本は唐の副使として新羅へ赴き、王位を継承した新羅王を冊封した。たぶん正使が旅の疲れに耐えられなかったか、あるいは新羅の気候風土になじまなかったせいもあって、倒れて病死した。故に苗弘本は「その礼を掌り、身分の差を明らかにし、夷人はその権威を畏敬し、喜んで受けた」。しかし、現存する史料を調べると、新羅へ赴いた使者が当地で病死した記載は見えない。韓国側の史書『海東繹史』巻三七に、「武宗朝の会昌年間に、左庶子薛宜僚を新羅冊贈使に任命した。（薛）宜僚は新羅へ到着して間もなく病気に罹り、判官の苗甲は大使の権力を代理して冊封礼を行なった」とある。この史料の出典は『女侠传』である。この記載は誌文と類似するが、誌文では苗弘本を副使とし、『海東繹史』では判官としている。『海東繹史』でははっきりと、唐が遣わした正使は薛宜僚とし、苗弘本を「苗甲」とするが（甲は苗弘本の字か、史料に証明できる記載がないため不明）、これらは誌文に見えない。両記事には不一致なところが存するのである。いずれにしても、誌文は従来の史書に闕漏するところを補っており（新羅へ赴いた時期を明記していないだけ）、『海東繹史』の記載を考え合わせれば、苗弘本の一行が新羅へ行ったのは武宗朝の会昌年間である。

唐の使者は新羅へ行く途中によく危険に遭った。元和七年（812）に崔廷が使者として新羅へ赴いたが、その墓誌に「海を渡り、国のためにためらうことなく出発することは必要である。朝廷は困っているところ、夫人は情理をよく諭し導いた」とある。すなわち、使者は険しい海を渡らなければならないので、朝廷はその人選で困っていた。崔廷の妻が崔廷をよく諭して、新羅へ赴く決心をさせた。これについては史料にも記載されている。大暦初年、唐が倉部郎中兼御史中丞の帰崇敬らを新羅へ赴かせたところ、「海の中央は波が激しく、船が壊されて浸水し始め、みんな驚き恐れた」という⁽²⁰⁾。最終的には危機を無事に乗り越え、崔廷と朱朝政は新羅に三年間滞在した。崔廷の妻の鄭氏は「出発から帰還まで、毎日髪はぼうぼうと乱れて顔は汚れ、加護を求めに仏寺へ向かって、果たして無事に戻った」⁽²¹⁾。これは崔廷の一行の海上航行を心配したからであろう。朱朝政の母の趙氏は、「嗣子の朱朝政が命令を受けて鷄林で三年間滞在するため、（趙

氏は) 心配でならず、朝夕に礼拝念仏して加護を求めた。神力のおかげをもって安全に帰国した」⁽²²⁾。昼夜に仏に祈祷し、その加護を求めたため、幸いにも二人は困難と危険を経験しつつも、無事に帰国することができたわけである。

宦官の王文擗は、新羅から帰ってくる途中に台風に遭い、危険な境地に陥った。その墓誌によれば、「王文擗の一行は使命を終え、唐へ帰る途中、潮が引いて風向きが逆回りになった。唐に到着せず、船上で怖くて不安にしていた。闇夜に焦ってぼんやりとし、魂が混乱したまま朝になった。ああ、困難と危険を嘗め尽くし、予測不能な災難と異常な現象が相次いで発生した。波が揺られて天まで届き、雲が缥缈となって太陽を覆い隠した。兵士や水夫は次々と死亡し、悪毒も絶えずうつつって病気を起こした。互いに助け合い帰国したものの、睡眠も飲食も不振となり、薬を飲んでも治らず、急に亡くなった。享年五十三であった」⁽²³⁾。この記載によれば、当時の人は潮汐のことを知っていたとはいえ⁽²⁴⁾、その程度は高くない。特に内陸部から海に行く点が心配であり、海で台風などに遭ったら、体調をこわして命さえ脅かされてしまう。これは上述の大使贊善大夫の苗弘本の例にも示されている。「新羅使の副手を務め、新羅王の嗣子を冊封する。命令を受けて新羅に着くと、正使が病死し、公(苗弘本)は冊封礼を代行した……」⁽²⁵⁾。ほかの史書、例えば『太平広記』にも、政府や民間で新羅へ赴く途中に危機に遭い、ほかのところへ漂流してしまった話が見える⁽²⁶⁾。このような厳しい状況と、また中唐以降に東アジアの国際関係が複雑化したことは、唐が新羅へ宗主国の権力を行使するのに、一定程度不利な影響を及ぼした。そこで、在唐の新羅の質子あるいは宿衛者が新羅へ赴く使節団に加入するようになる。これは、彼らがもともと相応する能力を備え、新羅に行く意欲もあったからだが、これによって中唐以降に唐が新羅へ遣わす新鋭となった。このようにして、会昌元年、天祐元年に唐は、新羅宿衛者の金雲卿、金文蔚を使者に任命し、元和七年、元和十五年、宝曆二年にそれぞれ金沔、金士信、金允夫を使節団の副使にした。かくして毎回の任務は円満に終わり、また唐が宗主国の権力を行使し、唐の初期から実施してきた質子制度を持続させることにもなった。

唐の使者が長期に新羅に滞在したことについて、常識的に考えると、使者は弔問、哀事の知らせ、冊封などの使命を終えたら、すぐに帰国するはずである。しかし、特別の場合、彼らは新羅に残って滞在せざるを得なかったこともあった。『朱公故夫人趙氏墓誌銘』に、趙氏の嗣子、つまり宦官の朱朝政は、「命令を受けて鶏林で三年間滞在するため、(趙氏は) 心配で、朝夕に礼拝念仏して加護を求めた」とあった。『崔廷墓誌銘』によると、崔氏は元和七年(812)に、「新羅王が亡くなって、国の法令を宣して外夷を慰問する者を選んだ。公(崔廷)に尚書職方員外郎を授け、御史中丞を兼任させ、紫金魚袋を賜い、吊祭冊封使に任命した。期年にして帰国した」という。ここの「期年」は三年である(一年とする見解もある)。すなわち、上述した三件の墓誌では、唐の使者は新羅へ往復するのに三年かかったとし、前者ではその時期と目的をはっきり記しておらず、後者では「吊祭冊封使」とはっきり示している。咸通年間の進士の李昌符は、「君は鶏林へ赴かんと、冊書を持って使者の馬車に乗った。海を越える道程ははかりきれず、遠く船は漂い行かん。故郷を振り向けば、そこには落日が見える。都城の宮闕を回想しつつ、戻り潮を羨む。霧は青山を覆ってばやけ、逆巻く大波は青空まで届く。新羅の春に陽気が来るのは早く、天は祖州と繋がって遥かに遠い。私は哀愁を抱えつつ、あなたと三年後の約束を結ぼう。三年後

に必ず石橋へ迎えに行くと」⁽²⁷⁾。詩の最後にも「三年」とある。唐の使者はなぜ三年も新羅に滞在したのか。この三年間に彼らはいったい何をしていたのか。ただの弔問、冊封で三年が必要とされたのか。史料の裏付けが欠いているため、今のところ不明である⁽²⁸⁾。

三、「日本」国号の出現と新出土墓誌の探索

1、新発見の墓誌に見られる「日本」国号

「日本」国号について、学界では次の二説が唱えられている。一つは則天武后による勅封とするもの、もう一つは日本が自ら改称したとするもの。前者を支える史料は『旧唐書』卷一九九上「東夷日本伝」と『史記』卷二「夏本紀」にある〔唐〕張守節『正義』が引く『括地志』の記載である。後者の出所は『唐会要』卷一〇〇「日本国」、『新唐書』卷二二〇「東夷日本」である。「倭」が「日本」に変えられた理由は二つあり、一は日本の地理環境は「日に近い」、二は「倭」という名が雅でないことを嫌悪する」である。

上述した諸史料に、「倭」が「日本」へと変えられた時期を高宗朝の咸亨元年（670）前後とし、その事件は、日本が使者を遣わして高麗討伐の祝賀をしたことである。台湾大学の高明士教授は最近論文を発表し、改名したのは六六八年に頒布した『近江令』によったものだと主張している⁽²⁹⁾。史書に上記の記載があるものの、「倭」から「日本」へ変えられた具体的な状況は、これからさらに掘り下げて行く必要がある。前世紀末から今まで見つかった三件の唐の墓誌は、学界に注目されてきた。これらの墓誌の出現は文献史料に合致しているばかりか、未解決な問題をはっきりさせてもいる。

1992年に台湾大学の葉国良教授が台北の骨董屋で偶然にも唐の『杜嗣先墓誌』を発見した。その誌文に「日本」という二文字があった。それを書き写し、その研究論文を1995年の『台大中文學報』第七輯に発表した。それによれば、

徐州刺史杜嗣先墓誌はその子の維驥が書いたもので、序文があるが銘はない。この墓誌は従来の墓誌リストに収録されていない。1992年、私は台北の『寒舎』という骨董屋でその原石とその妻の墓石を見つけ、書き写した。誌文が28行、一行で28字、『皇朝』『遺訓』などの字の前に一文字か二文字空けてある。（後略）

誌文の墓主と日本遣唐使関連の記載は、「又属皇明遠被、日本來庭。有勅令公与李懷遠、豆盧欽望、祝欽明等賓於蕃使、共其話語。」（皇帝の聖明が遠くまで及び、日本が来朝した。公と李懷遠、豆盧欽望、祝欽明などの勅が下され、日本の使者を接待し、共に話し合った）とあり、『旧唐書』卷一九九上にも、

長安三年、其大臣朝臣真人来貢方物、朝臣真人者、猶中國戸部尚書、冠進德冠、其頂為花、分而四散、身服紫袍、以帛為腰帶。真人好讀經史、解屬文、容止温雅。則天宴之於麟德殿、授司膳卿、放還本國。

長安三年、その大臣の朝臣真人が方物を来貢した。朝臣真人という者は（その官職のレベルが）中国の戸部尚書に相当し、進徳冠を冠り、その上は四方に散る花の形で飾られ、身に紫色の長衣を着、帛をベルトとする。真人は経籍と史書を好み、文章も堪能で、顔かたちが温和である。則天武后は、麟徳殿で宴席を設けて彼を招待し、司膳卿の職を授け、日本に帰した。

とある。つまり墓誌は、長安三年（702）に武周朝廷が第七次遣唐使を接待したことを伝えている。誌文によれば、「日本」国号は702年まで遡れる。葉教授の研究成果は当時、学界から注目されなかった。その論文は後に同氏『金石統拾』（台湾中安出版社、1999年）に収録された。

2004年十月、西北大学博物館が『井真成墓誌』を入蔵した。墓主は遣唐使の随行員（その身分を在唐の日本留学生だとする学者もいる）という特別な身分で、それに加えて、これまでに初めて発見された入唐日本人の墓誌であり、中日両国の学界の注目を集めた。その誌文は次のごとし。

公姓井、字真成、國号日本、才稱天縱、故能□命遠邦、馳騁上國。蹈禮樂襲、衣冠束帶□朝、難与儔矣。豈圖強學不倦、聞道未終、□遇移舟、隙逢奔駟。以開元廿二年正月□日、乃終于官第。春秋卅六。皇上□傷、追崇有典。詔贈尚衣奉御、葬令官□。卽以其年二月四日窆于萬年縣滻水□原、禮也。

誌文に墓主の井真成は開元二十二年（734）に亡くなったと記しており、これによって、学界ではその入唐時間は717年と733年の二説に分かれている。いずれにせよ、井真成墓誌に見える「日本」国号は明らかに杜嗣先墓誌より遅いと学界に認められているが、否定できないことは、日本人の井真成墓誌の発見とそれが注目を集めたことによって、杜嗣先墓誌に「日本」国号が記されていることが広げられ、今世紀の焦点になったことである。井真成墓誌の注目度がどれほど高いかについて、筆者の調査によれば、出版された論文集の中で井真成墓誌に触れたのは、専修大学・西北大学編『遣唐使の見た中国と日本』、日本『古代文化』2005年特別号、藤田友治編著『遣唐使・井真成の墓誌』など、2005年より数年間にわたって、井真成、杜嗣先墓誌は相次いで中日学界の注目の的となり⁽³⁰⁾、筆者もこれについて述べたことがある。

2011年の『社会科学戦線』第七期に、吉林大学古籍研究所の王連龍が「百濟人『禰軍墓誌』考釈」を発表したことがきっかけとなって、学者たちはこの墓誌にも注目し、その中に潜んでいる問題点を探り始めた。

『禰軍墓誌』は、西安市長安区郭杜鎮で出土、世紀の変わり目に盗掘され、西安文物市場に流れた。『禰軍墓誌』は特に重要な石刻文物であったため、関係当局の重視するところとなった。報道によれば、現在その事件は既に解決され、墓誌も西安市文物保護考古研究院に収蔵されている。『禰軍墓誌』に「日本」という文字があり、加えて禰軍が百濟移民という身分であったため、中日韓三国の学界で広く注目を集め、その中の問題点に関してさまざまな見解が出された⁽³¹⁾。

禰軍墓誌によれば、禰軍は660年に熊津方領だった弟の禰寔進の投降にしたがって、百濟王の扶余義慈を唐軍に献上した。誌文に、

去顯慶五年、官軍平本蕃日、見機識變、仗劍知歸、似由余之出戎、如金磧之入漢。聖上嘉嘆、擢以榮班、授右武衛瀋川府折衝都尉。

顯慶五年（660）、官軍が本蕃（百濟）を平定したとき、（公は）事の兆しを見て利害禍福を察知し、兵を挙げて（唐に）帰すべきことを理解した。（それは）まるで由余が戎を出て（秦に帰し）、（匈奴の）金日磧が漢に帰したことと同様であった。天子は（公のことを）ほめたえ名誉ある地位に抜擢し、右武衛瀋川府折衝都尉を授けた。

とあるように、禰軍は唐に投降し、転々と長安に到達して、京で「右武衛瀋川府折衝都尉」を授けられた。瀋川府は現在の西安市東郊にあり、都の守備を担当している。折衝都尉は正四品の武官である。この点からも、唐側が百濟人の禰軍を信頼していたことが窺える。これは、その弟の禰寔進が唐では左威衛大將軍を務めていることと関係するかもしれない。百濟の將軍として禰軍は、唐に降参する前に日本に赴いたことがあるようで、故に唐が彼を日本へ派遣して交渉の責任を任せた。誌文に次のようにある。

於時日本余嚆、據扶桑以逋誅。風谷遺眈、負盤桃而阻固。万騎巨野、與盖馬以驚塵。千艘橫波、援原虵而縱瀾。以公格謨海左、龜鏡瀛東、特在簡帝、往尸招慰。公徇臣節而投命、歌皇華以載馳。飛汎海之蒼鷹、翥凌山之赤雀。決河眦而天吳靜、鑑風隧而雲路通。驚□失侶、濟不終夕、遂能說暢天威、喻以禍福千秋。僭帝一旦稱臣、仍領大首領數十人將入朝謁、特蒙恩詔授左戎衛郎將、少選遷右領軍中郎將兼檢校熊津都督府司馬。

時に日本の残党は、扶桑に依拠して誅伐を逃れていた。風谷の残党は、盤桃を拠点にして（その敵を阻むさまは）堅固であった。万もの騎兵は野に広がり、蓋馬とともに塵をまきあげていた。千もの船は波をさわがせ、原虵を援けて激しく波立たせた。公が海左（海東）において謀略に優れており瀛東（海東）において手本たる人物であることから、特に帝に選ばれて、招慰をつかさどった。公は、臣節に従って身命を投げ打ち、使者として素早く赴いた。（その姿は）空を駆けて海を渡る蒼鷹のようであり、高く飛び上がって山を超える赤雀のようであった。河の堤を決して（その怒濤の勢いで）天吳（水神）は静まり、風の道を突き進み雲の路が通じた。（その速さは）はぐれた鴨が連れ合いを探すのにも似ており、一晩のうちに目的地に到達するほどであった。そうして朝廷の威厳をよく述べ説いて、今後永遠に福を享受させると諭した。僭帝がにわかになら（自らを）臣と称したので、（公はその国の）名望ある貴族数十人を引き連れて唐に行き皇帝に謁見した。特にありがたい詔をいただいて左戎衛郎將を授けられ、しばらくして右領軍中郎將兼檢校熊津都督府司馬にうつされた。

咸亨三年（672）十一月二十一日、禰軍の弟、左威衛大將軍の禰寔進が長安南の高陽原に埋葬された。その日に、禰軍は右威衛將軍に授けられた。これは唐が禰氏一族の立てた功績に対する肯定と補償である。禰軍は儀鳳三年（678）二月に長安の延寿里にある私邸に亡くなった。享年は六十六歳であった。彼は同年十月に雍州乾封県高陽里に葬られた。上記によれば、墓誌が書かれたのは同年十月以前のことで、また儀鳳三年に倭国が日本に改名したことが唐の一般庶民に広く

知られていたことを示している。これは使節として日本へ行った禰軍の墓誌にも反映された。前文に挙げた杜嗣先墓誌、井真成墓誌にある「日本」国号より、禰軍墓誌は「日本」国号の出現時間を二十年余繰り上げた。すなわち、「倭」が「日本」国号に改正されてから八年目であり、それは当時の唐では共有された事件になっていた。

しかし、この中には疑問点も残っている。

一、670年に、倭国は「賀平高麗」で使臣を派遣して入唐し、そのうちに国名の変更問題を提起した。これについて、唐側がどのような認識を持っていたのか。もし日本が自ら変えたとしたら、白村江の戦の後、日本が唐との関係修復を求めた際に、唐側は日本の国名変更を喜んでそれを認めたのだろうか。もし認めていなければ、唐側が作った禰軍墓誌に、改名した「日本」国号が刻まれているのには、どんな契機が潜んでいるのか。これについては今後に期したい⁽³²⁾。

二、もし「日本」国号が則天武后より下賜されたものであれば、一の問題は成立しなくなり、その時の唐日関係は緩和していたことを示している。

杜嗣先、井真成及び禰軍墓誌の制作、埋葬時間はそれぞれ数十年の差があるが、「倭」から「日本」への改名問題を裏付けている。禰軍墓誌にある「日本」について、学界では異なる見解が存在しているが、墓誌は百濟移民の禰軍が確かに唐側の使者として日本に行ったことを示しており、また白村江の戦後に唐日関係が緩和したことを側面から表している。唐がその時に朝鮮半島に出兵したことに関連しているか否かも、さらに考察する必要がある。

2、新出土墓誌と日本、新羅の「争長」事件

呉懷実の名前は筆記小説『安祿山事跡』、徐浩撰、顔真卿書『多宝塔碑文』及び『旧唐書』巻二〇〇「高尚伝」に見える。また、『続日本紀』巻十九に次のようにある。

丙寅、副使大伴宿祢古麻呂自唐国至。古麻呂奏曰、「大唐天宝十二載、歳在癸巳、正月朔癸卯、百官諸蕃朝賀、天子於蓬萊宮含元殿受朝。是日、以我次西畔第二吐蕃下、以新羅使次東畔第一大食国上。古麻呂論曰、自古至今、新羅之朝貢大日本国久矣、而今列東畔上、我反在其下、義不和得。時將軍吳懷實見知、古麻呂不肯色、即引新羅使次西畔第二吐蕃下、以日本使次東畔第一大食国上」。

丙寅、副使の大伴宿祢古麻呂は唐の国から帰国した。古麻呂は次のように奏した。「大唐天宝十二年、歳は癸巳にあり、正月の朔癸卯に、百官及び諸蕃が朝賀し、天子は蓬萊宮の含元殿で朝賀を受けた。当日、私の席を西側の二番目、吐蕃の次位に置き、新羅使者の席を東側の一番目、大食国の上位に置いた。古麻呂は、大昔から、新羅は長い間にわたって我が大日本国に朝貢してきた。しかるに今（その席）は東側の上位にあり、我が国はその下位に位置することにしてている。これはそれぞれの身分に合わないことである、と論じた。時に（唐の）將軍の呉懷実は古麻呂が憤然として色をなしたことを察知し、新羅使者を西側の第二位、吐蕃の下位に引導し、日本の使者の席を東側の一番目、大食国の上位に移した」。

この史料は、日本と新羅の唐におけるいわゆる「争長」事件の原始史料である。これに対して、

韓国の卞麟錫教授は論文を書き、この事件は全くのフィクションだと考えた⁽³³⁾。日本の山尾幸久氏は卞氏の観点到賛同している。池田温氏も韓日学界のこの事件に対する研究現状を総述している⁽³⁴⁾。ほかに、日本の福田忠之氏、中国の王小甫氏の論文もある⁽³⁵⁾。学者たちが史料に基づき、唐の朝賀儀礼の藩国の席次について論じて得た結論はそれぞれ異なっているが、その中で非常に重要な人物、呉懐実と言及する者は少なかった。

そんな中、日本の石井正敏教授「唐の『將軍呉懐実』について」は⁽³⁶⁾、呉懐実は玄宗朝で名高い宦官の高力士と親しい関係で、恐らく監門衛將軍を務め、皇帝宮門の警備を担う重要人物だった、としている。唐の朝賀礼儀の規定に従えば、儀式で周辺諸国の席次の配置を担当する最高責任者は、礼部尚書と太常寺卿であった。これについて、日本の石見清裕氏が論文を書き、儀式は中書省通事舎人、礼部郎中と太常丞が掌り、具体的な事務は門下省典儀と太常寺奉礼郎が担当するという。天宝末に、高力士は玄宗から信頼を得て、その勢力は王朝内部に浸透していたが、それによって彼が朝賀儀礼に参加できたかは討論すべき問題である。新発見の宦官、呉懐実の墓誌が、何か有効な考えを提示できるかもしれない。当墓誌は2007年に西安市西三環の東凹里村の工事現場で発見され、出土地は唐墓 M11号と命名された。そこはまた、宦官の呉遊芸墓誌などの出土地でもある。呉懐実墓誌は陝西省のある考古研究機構に所蔵されている。その誌文は次のごとし。

天寶七載、我英主念悃之深至、而渥恩之未遑、識燕鵠以當侯、開龍顏而授印、遷雲麾將軍、右監門衛將軍、兼知内侍省事。皇明久暢、休應薦答。於是郊天享地之禮敍、崇號改年之渙舉、幽明合贊、雨露增濡、進封濮陽郡開國公、食邑二千戶。凡前後歷位者九、益封者四、盛金章戟戸之秩、專廟享敍賓之使、役智增勞、福謙反疾、(後略)……。

天宝七年、我が英主は呉懐実の至誠を考えたが、これまで彼に皇恩を施す余裕はなかったので、その才能をよく理解し、印綬を授け、雲麾將軍、右監門衛將軍、兼知内侍省事に遷した。皇帝の聖明は長いあいだ天に届いているから、めでたいしるしが発生し、その返しとして祭祀を行なうことになった。呉懐実は天地への祭祀活動で秩序を管理し、尊号、年号の詔をも発布した。昼夜の別なく皇帝を補佐し、皇帝からますます信頼されるようになり、濮陽郡開國公に封じられ、食邑は二千戸であった。それ以来、九つの職位を経験し、四回にわたって封邑を増やされた。高級官員の秩序を整え、太廟の享祭で賓客の席次を管理した。知恵をよく運用し、あくせくと働いた。福にあまりにも恵まれるとかえって病気にかかってしまうもので、(後略)……。

とある。まず、上述した石井正敏氏の文で呉懐実は監門衛將軍を務めているが、誌文にも確かに天宝七年(749)に彼が「雲麾將軍、右監門衛將軍、兼知内侍省事」だったとあり、元日の朝賀大典についても確かめられる。

次に、誌文によって呉懐実その人の宦官たる身分を確認でき、しかも彼は唐では宦官を管理する機構の最高長官でもあった。

第三に、誌文に呉懐実が当時担当した実務を「郊天享地之禮敍、崇号改年之渙舉」「盛金章戟

戸之秩、専廟享敍賓之使」と述べており、祭祀、朝賀儀式の席次の配置と関連するようである。

第四に、上述したように、天宝末に宦官の勢力は朝廷内部に浸透しており、重大事件にも重要な役割を果たしていた。それに伴って、それまでの国家儀礼の慣例も、朝廷官員に対する皇帝の信頼度の低下により、その代理人に宦官を参与させ、さらに慣例化するまでに発展していた可能性が考えられる。これによって、儀式に人為的な色彩が付けられ、曖昧な問題も発生してしまう。そのため、この時期の歴史事件を考えるにあたっては、宦官の影響を考えることが必要である。要するに、宦官呉懷実墓誌の出土は、天宝年間の日本新羅「争長」問題をめぐる結論を根本的に変更するわけではないにしても、呉懷実が務めた官職から見れば、「古麻呂が抗議した」事件は由来のない話ではない、ということがわかる。この問題を円満に解決するには、今後の新出墓誌に期待したい。

終わりに

本文は、新発見の唐人墓誌、在唐新羅人墓誌と、これまで注目されなかった碑刻史料を通して、天宝大暦年間に、苦難を乗り越えて海を渡って唐新羅間を往復した両国の使者や僧侶の関連事跡、文献に記された唐代後期に新羅へ赴いた使者の事跡、墓誌に見える「日本」国号の経緯、天宝末の新羅日本「争長」事件に関わる重要な人物たる呉懷実墓誌などを検討した。上記の墓誌史料は、学界に新しい人物像と素材を提供したが、その真実を探る上で、ほかの史料を借用して論考することが必要であり、まだ検討する余地があるかもしれない。ご教示を賜れば幸いである。唐代東アジア諸国の文化交流を検討し、歴史の痕跡を探り、国のために困難を乗り越えて命を投げ打った当時の人々の精神を研究することは、私たちにとって現実的な意味がある。現存する文献資料のほか、墓誌碑刻資料ももっと多くの注目を集めてしかるべきである。新史料の出現によって、唐代東アジア文化交流の研究がより促進されることを祈りたい。

【註】

- (1) 胡戟「快樂歴史和对歴史觀的重新思考」(『社会科学評論』第一期、2004年)。
- (2) [韓] 權憲永『古代韓中外交史：遣唐使研究』(ソウル一潮閣、1997年)、李大龍『唐朝和辺境民族使者往来研究』(黒龍江教育出版社、2001年)、堀敏一著、韓昇編、韓昇、劉建英訳『隋唐帝国与東亞』(雲南人民出版社、2004年)、拙著『唐朝与新羅關係史論』(中国社会科学出版社、2009年)、王勇主編『東亞座標中的遣隋唐使研究』(中国書籍出版社、2013年)。
- (3) 拙稿「唐『李訓夫人王氏墓誌』関連問題考釈」(『記念西安碑林920年華誕国際学術研討会論文集』、文物出版社、2008年)。
- (4) 胡戟、采新江主編『大唐西市博物館館藏墓誌』(中册)(北京大学出版社2012年、第623頁)。また、拙稿「新公布在唐新羅人金日晟墓誌考析」(『唐史論叢』総第十七輯、陝西師範大学出版社2013年)参照。
- (5) 『全唐文』卷四四五「易州抱陽山定惠寺新造文殊師利菩薩(堂)記」。
- (6) 黎虎「唐代的押蕃使」(『慶州史学』総第二十輯、2001年)、姜清波「試論唐代的押新羅渤海兩蕃使」(『暨南学報』2005年第一期)参照。
- (7) 胡戟、采新江主編『大唐西市博物館館藏墓誌』(中册)(北京大学出版社、2012年、第623頁)。

- (8) 『資治通鑑』卷二一五、唐玄宗天寶元年正月条。
- (9) 『册府元龜』卷五四帝王部、尚黄老。
- (10) 『三国史記』卷二〇高句麗本紀、荣留王。
- (11) 拙著『七世紀中葉唐与新羅関係研究』(中国社会科学出版社、2003年)。
- (12) 車柱環「金可記与道教」(『第一屆國際唐代學術會議論文集』、1989年)。張澤洪「唐五代時期道教在朝鮮的傳播」(『宗教学研究』第二期、2004年)。張寅成「古代韓國的道教和道教文化」(台湾國立成功大學歷史學系編『成功歷史學報』總第三十九輯、2010年十二月)。
- (13) 『類編長安誌』卷五寺觀によれば、誌文にある玄真觀の前身は長安の景龍觀で、長安城内崇仁坊の西南に位置する。最初は中宗の娘、長寧公主の邸宅で、後に上奏によって景龍觀に変更され、天寶十二年(752)に玄真觀に改名された。
- (14) 周偉洲「長安子午谷金可記磨崖碑研究」(『中華文史論叢』第一期、2006年)、同氏『漢唐氣象：長安遺珍与漢唐文明』(中国社会科学出版社、2013年)に所収。
- (15) 韓国磐「南北朝隋唐与百濟新羅の往来」(『歴史研究』第三期、1994年)楊昭全『中国—朝鮮・韓国文化交流史』(第一冊)(崑崙出版社、2004年)。
- (16) 『全唐文』卷六三九「秘書少監史館修撰馬君墓誌」。
- (17) 竹内理三校訂、解説した『翰苑』(日本太宰府天満宮文化研究所編、弘文館、1974年)。顧愔『新羅国記』の存在は『新唐書』卷五八「芸文志二」に確認できる。
- (18) 『大唐故興元原從登仕郎内侍省内侍伯員外置同正員上柱国朱公故夫人天水郡趙氏墓誌銘』に「再会するとき、悲しみは喜びの倍になる。十日後、大夫は皇帝から恩命を受け、宮闈令から閣門使に拜された。家族内外はみな祝賀し、これを夫人が誠意で加護を願った結果とした。平素の願いが叶ったので、もう遺憾なことはない。ああ、親孝行をしようと考えていたとき、急に夜の泉に悲しむことになる」とあり、趙氏が亡くなったのは、その子の朱朝政が長安に帰って間もなくだったことがわかる。
- (19) (清)陸増祥『八瓊室金石補正』卷七二參照。陸氏は「内侍伯朱夫人趙氏合祔志」の「(崔)鏐は朝廷の高官として大夫とともに三韓へ赴いた」によって、『新唐書』卷二二〇「東夷、新羅伝」に、「新羅王の彦昇が亡くなり、その子の景徽が立てられる。大和五年に太子左諭徳の源寂を遣わし、礼を以て冊封、弔問を行った。朝政(趙氏の子の朱朝政)及び鏐(崔鏐)は源寂とともに赴いた。左諭徳の源寂は正四品下、鏐は右贊善大夫で正五品上であり、鏐を副使としているはずであり、その詳細は不明である」とあり、陸氏は朱朝政、鏐が源寂とともに新羅へ赴いたと考える。これは一つの説になる。ただし、もし誌文からみれば、朱朝政、鏐一行は新羅に三年も滞在し、正使の源寂も同じように新羅に三年滞在したのか。あるいは源寂とその隨員は先に帰国し、朱朝政、鏐などは新羅に滞在したか。一つの可能性として、史料から見れば、朱朝政、鏐は弔問、冊封を目的とした源寂とは別の目的で831年に新羅へ赴いた可能性は高いと思われる。
- (20) 『旧唐書』卷一四九崇敬伝。
- (21) 周紹良、趙超編『唐代墓誌彙編』大中六八。
- (22) 周紹良、趙超編『唐代墓誌彙編』大中七九。
- (23) 周紹良、趙超編『唐代墓誌彙編』会昌三七。
- (24) 王賽時「唐朝人の海洋意識与海洋活動」(『唐史論叢』總第八輯、三秦出版社2006年)。
- (25) 周紹良、趙超編『唐代墓誌彙編』大中九三。
- (26) 『太平広記』卷四八一。
- (27) 『全唐詩』卷六〇一李昌符「送人入新羅使」。
- (28) この文は拙稿『唐中後期赴新羅使者関連問題考析』に基づいたものであり、その中の一部は修正した。
- (29) 高明士『「日本」国号与「天皇」制的起源』(『台湾師範大學歷史學報』總第四八輯、2012年)。
- (30) 拙稿「杜嗣先墓誌、井真成墓誌与唐代中日関係研究」(『陝西歷史博物館館刊』總第一八輯、三秦出版社2011

年)。

- (31) 禰軍墓誌の中に見える「日本」は日本の国号であるか否かは、学界においていろいろな見解がある。最初に本墓誌を発見した王連龍氏及び明治大学の氣賀澤保規氏はそれを肯定しており、筆者も賛同する。一方、奈良大学の東野治之「百濟人禰軍墓誌の『日本』」(『図書』2012年二月号)は、それを日本ではなく、朝鮮半島のある政権だ、という見解を示した。中国学者の葛継勇氏は『国史学』第二〇九号(2012)、『専修大学東アジア世界史研究センター年報』(2012)に、関西大学文学部の西本昌弘氏は『日本歴史』2013年四月号に、禰軍墓誌に見える「日本」「風谷」「扶桑」など語彙の意味を検討した論文を公表した。また、早稲田大学文学部の『史滴』総三十四輯に禰軍墓誌の誌文の詳細な訳注がある(2013年)。
- (32) 無視できないことであるが、咸亨元年より唐はこれまで仲間だった朝鮮半島の新羅と七年間にわたって交戦した。すなわち「唐羅戦争」である。白村江の戦後に緊張していた唐と日本との関係が緩和になったのは、「唐羅戦争」と関係するのではなからうか。なぜなら禰軍墓誌に「日本」の国号が出ているということは、唐の立場から見れば、「日本」を認可し、至る所に伝達して一定の範囲内に使用していたはずである。でなければ、禰軍墓誌にこの国号は書かれなかったであろう。「唐羅戦争」に関しては、拙稿「論羅唐戦争の性質及其双方向的交往」(『中国辺疆史地研究』2005年第一期)、また拙稿「唐羅戦争関連問題の再探討」(『唐研究』総第十六集、北京大学出版社2010年版)参照。
- (33) 卞麟錫「中国唐代與新羅的關係：兼論『続日本紀』所載古麻呂抗議」(『大陸雜誌』総第三十二卷第九期、1966年)、同氏「唐代外国使争長之研究」(『亞細亞研究』総第十卷第四期、1967年)、同氏「從唐代外国使之争長事例再論古麻呂抗議：以批判『続日本紀』相關史料為主」(『第一屆國際唐代學術會議論文集』、1989年)。
- (34) 池田温「論天寶後期唐朝、新羅與日本的關係」(同氏『唐研究論文選集』、中国社会科学出版社、1999年版)に所収。
- (35) 福田忠之「唐朝之東北亞諸国觀及東亞諸藩国國際地位：以唐代各国争長事件為中心」(王小甫主編『盛唐時代與東北亞政局』、上海辭書出版社、2003年)に所収。王小甫「唐朝與新羅關係史論：兼論統一新羅在東亞世紀中的地位」(『唐研究』第六卷、北京大学出版社、2001年)参照。
- (36) 石井正敏「唐の『將軍吳懷実』について」(『日本歴史』総第四〇二輯、1981年)参照。

追記：本論で扱った吳懷実墓誌について、本稿の初校時に西安の三秦出版社『唐史論叢』第二十輯に杜文玉教授の論文「唐代吳氏宦官家族研究」が発表された。この論文は本墓誌に論及し、墓誌文も載せていて、参考価値が高い。ただ残念ながら『続日本紀』にみえる吳懷実の記事に言及せず、この面の分析もない。